

2012年8月からアメリカ合衆国のカリフォルニア大学バークレー校の工学部 Applied Science and Technology の博士課程に所属しています、森亮です。学位留学を決め、今に至るまでを簡単にレポートします。

## 1. 学位留学という決断

「視野を広げる」「グローバル」「リーダーシップ」等のそういったボンヤリしたものを身につけるというプログラム等にお金と時間を惜しみなく払う人が多いですが、なぜ学位等の具体的なモノを得たいと考える人は(相対的に)少ないのでしょうか？ボンヤリした具体性のないものは、副次的にでもついてくるモノで、それを目的にしたところで、「普通」の枠からは出られないと私は思います。

そういう私がアメリカ大学院学位留学を目指し始めたのは学部三年の後期、研究室選びの時期でした。それまでの私は、英語嫌い(というか英語も私を嫌っている気すらする)+海外経験ほぼゼロ(高校生の時の修学旅行のみ)+ひねくれた性格(交換留学や短期留学などに参加する人に対しては時流に乗ったお利口さん達であると斜に構え、むしろ内心小馬鹿にしていた)というような、パスポートすら所有しない、海外とはかけ離れた場所に位置する純粋ドメスティック人間でした。しかし、そのひねくれた性格故に、「何か人と違った面白そうな進路」を模索していました。そんな中、研究室選びの際に、後の慶應義塾大学での指導教官となる、バークレーで Ph.D.を取得された教授の話を伺い、かなり影響されたところで、ちょうどいいタイミングで慶應で開催されていた学位留学の説明会に出席し、そこで具体的な情報を得ました。その後、自分の気持ちと情報の整理、つまるところの、アメリカの専門教育は大学院からが本格的なものであり、世界中から非常に賢い人達が集まってくる文字通りトップクラスの環境に身を置いてみたいという理想家的思想と、経済面、学位取得後の進路、自分の興味などの現実的な事情、目標とを擦り合わせた結果、「目指して損は無い」という結論が叩き出されました。

## 2. 出願まで

鼻息荒く学位留学を目指し始めたものの、そんなうまく物事は進む訳がなく、私の前には、自分が人生において作り上げてきた負の遺産である英語という壁が大きく立ちはだかりました。さらに最近の海外大学院事情(合格率など)を小耳に挟み「これ無理じゃない?」と思っていた中、2ヶ月半アメリカ、ライス大学での研究(インターン)に参加しないか、という話が舞い込んできました。それに参加するということは、慶應での研究が大幅に遅れる、引いては出願の際に必要な推薦状の内容が薄くなる、というリスクを伴っていました。しかし「結局全て不合格する可能性もあるし、行ける時に行っとこう、お金かかんないし!」という貧しい思考回路のもと、参加を決めました。

ライス大学では、初めてのアメリカでのストレスフルな日々の中、たくさんのトラウマを拵えました。情報社会とは言いますが、自分は暗い部屋で一人深夜まで実験をしている一方で、日本の友人達の楽しい様子がネットを通じて伝わってきて、「幸せとはなんだろう」などの哲学的”風”な思いを募らせました。そういった中で、本当にアメリカに行きたいのかを再考し始め、選択肢を増やすという意味でも、教授には内密に、滑り止めとしての日本の某国立大学への出願もコソコソと抜き無く行いました。8月の上旬に帰国したところ、教授には何故か私がこっそり出願していたことはバレており(まだ密告者探しています)、「退路を絶て」「中途半端はよくない」等のありがたいお言葉を頂きました。「なんとかなる、っていうかもうなんとかする！」と半ば自棄糞になりつつ、日本の大学院の受験はせず、再度アメリカ大学院を目指し始めました。

この時の教授からの言葉は今でもとても印象深く残っており、本当にその通りだな、と感じます。大きな目標ができた時、何かとやらない理由を探して結局何もしないよりは、やる理由を見つけて地道に行動した方がいいです。退路を絶って、もしダメだった場合でも、なんとかなるもんです。というより、それ相応の努力、実力があれば後から何とでもなることの方が多いかと感じます(少なくとも若い内は)。リスクマネジメントというのは大事でしょうが、よっぽどの事が無い限り、死ぬ事はないわけで、他人様に迷惑をかけない範囲で「退路を絶って」何かを成し遂げようとする方が若い内は楽しいはずです。私の場合は、自分がアメリカへの出願を躊躇った原因の根幹は行き着くところの「自分のダメな部分を見るのが怖い」「めんどくさい」であることが判明したので、リスクマネジメントもクソもなく、先述の通り半ば自棄糞になりつつ身を投じたのですが。

再起してから出願までの準備期間として約四ヶ月間、この短い期間で、彼女にフラれるというイベントも起こりつつ、(色々な意味で)死に物狂いで研究、勉強、作業等を行い、運良く出願に必要なスコアや書類等を揃える事ができました。

アメリカの大学の博士課程の学生は、大学または教授から学費、給料等を払ってもらいますが、日本から奨学金を得ていくということは、合格する為の非常に有効な手段で(向こうからしたら無料である&奨学金を得ているということでの能力の証明)あり、また船井情報科学振興財団はとても柔軟に対応して下さっており、全ての面において感謝してもきれません。

### 3. 進学先決定

最終的に、現在所属するカリフォルニア大学バークレー校の他にも数校からオファーをもらうことができました。バークレーから最初にオファーをもらったのですが、その時は研究室で叫び、奇声をあげながらキャンパス内を走り回りました(一人で)。海外大学院にいきたい、というきっかけを与えてくれた教授の出身校がバークレーなこともあり、バークレーのインパクトがとても強く、当初から第一志望として考えていたのですが、いざ数校から合格を

もらうと迷いました。というかこういうのって迷っている時が一番楽しく感じてしまうもので、無意識の内にその状況に浸っていたのかもしれない。気候なども含めた環境面、研究内容なども含めた学術面など、総合的に考えて、最終的に当初の志望通りパークレーに決定しました。

#### 4. 入学してから現在まで

渡米してから三ヶ月が経過するというところですが、少しずつ慣れてきたかな、というところです。研究の方はぼんやりとしたテーマはありますが、具体的にはまだ動けず、授業と宿題、研究に関しての基礎理論の構築で手一杯という感じです。予想はしていましたが、普段怠け者の私にとっては、このままこの生活を続けたら仙人になれるんじゃないだろうか、思う瞬間もあるくらい、修行的です。パークレーの気候、環境はとても過ごしやすく、カラリと晴れた日が多く、とても過ごしやすいです。しかし大変な時期にはそれが逆に「外はこんなに晴れているのに、私はといたら…」と考えてしまうこともあります。特に私の研究室のデスクは、外に見える窓の存在し得ない場所(つまり地下)の隅っこの方なので(もちろん携帯は圏外)、普段は暗く隅っこの方を好む性格の僕はとても落ち着くのですが、大変な時期は外の眩しさとのギャップがメンタルに響きます。

日本にいる限りでは自分の持っている時間、持っている能力を直視しないで済んでいましたが、未熟な部分など具体的な能力の無さを自覚させられる日々です。しかし、お金のことを心配せず、パークレーという場所でひたすら自分の為に勉強に集中できるという環境はとても恵まれているという感謝の気持ちを忘れず日々精進していきたいです。